

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

<精神的原風景(続)・青い空・川・緑への憧れ>

この3月11日は、忘れもしないあの東北大震災・原発事故から10周年の日である。ちょうど講演中に遭遇したが、帰宅してびっくりした。というか、地震と津波による凄まじい映像に恐怖を感じた。その惨劇で多くの人々が亡くなり、いまだに生きる根拠地である「ふるさと」に帰れず、避難したままの人も多い。外形的に街が作り直されたとしても、心の傷が癒えない人は余りにも多い。廃炉の見通は立たず、大地・海に降り注いだ残留放射能や、放射能汚染水の海洋投棄、体内被曝の影響は計り知れない・何も終わっていないのだ。

未だにこの状況なのに、忘れもしない”アンダーコントロール”という偽りのことばで得た東京オリンピック。その準備のために東北の復興工事は停滞したのに、スローガンは何と「復興五輪」。しかも、原発事故は無いことにして、再稼働を推し進め、原発の海外輸出も企み、大資本の儲けのためにがむしゃら「東京五輪」開催に向かっていく。そのスローガンもいつの間にか、「人類がコロナに勝利した証」に変えられている！

ボクは前の東京五輪も、大阪万博も、愛知万博も観に行かなかった(いや行けなかった)。だが、秋空の下、あの哲学者の如きアベベの走る姿にはいたく感動した。アメリカの放送権がらみで、酷暑に行われるかもしれない東京五輪は、見るべくもなく、そもそも正統性も無い。

そういえば、ボクの「故郷」の大阪の下町では、その青空はあまりなく、ガラス工場や、レンガ工場、鉄工所などから排出される煤煙で煤けていた。昔は「野崎参り」(小唄)の船が行き交った寝屋川は廃棄物で汚染され、小学生の頃にはもう魚釣りもできなかった・何と、朝鮮戦争時には川へ入って鉄くずを拾い、自転車屋さんに売ってわずかばかりの小遣いを得ていた。そもそもわが家の周りには緑地というもの無く、荒地で三角ベースの野球ごっこしかできず、緑

への憧れは大学志望の重要選択項目だった。

その後、様々な努力のすえに、わが「ふるさと」にも青空が見え始め、川も少しきれいになった。だが、その多くは、町工場がどんどん無くなり、環状線に近いことで小ざれいだがマッチ箱みたいな住宅や、下町庶民の日照権を奪う「マンション」というものに置き換えられたのだ。でも、無くなったものがある。

下町の庶民は日本人も朝鮮人もほぼ全員が貧乏人で、陰では悪口を言い合っているが、お互い助け合っただけ生きていけないつながりがあった。それが無くなったのだ・いまボクの「ふるさと」は岐阜になっている。

戦後80年近く、紆余曲折、登りも下りもあった。その結果としての現在をどのように受け止めたらよいのだろうか。森会長の発言に端を発して明らかになった日本社会の遅れに唖然とし、今までボクらは何をしてきたのだろうかと自問し、情けなくなる。ボクが下町で抱いた大切な精神的原風景(思想までは行かない心情・憧れの次元でしかないかもしれない)を実現するにはまだまだである。男女・民族など様々な平等も、労働・教育・言論・思想などの権利ももっともっと広げ深め、強めなければならない。お互いの様々な違い・多様性を認め合い、お互いから学び合おうという姿勢・対話の空間の確保こそ、いまもっとも求められているように思われる。

主宰:吉田千秋



岩手県大船渡市の皆さんと 2012年9月

*1月に続いて2月例会も、新型コロナ「緊急事態宣言」発令で休会となりました。今回も、皆さんから、「通信」No.151の感想、近況の便り、3月例会テーマの温暖化問題など、自由に書いていただきました。多様な感想・意見が寄せられましたのでお読み下さい

<東日本大震災・フクシマ原発事故から10年を迎えて>

先日、一宮市で開かれた小出裕章さんの講演会「原発事故から10年 放射能は今!? コロナ禍で揺れる この国の行方」に出かけました。

主な講演内容は、10年前に大事故を起こした福島第一原発の現状と放射能汚染被害の現状、そしてコロナ禍についてでした。その終盤に、差別用語満載ですが、作詞の別役実さんや作曲の小室等さんが何を伝えようとしたか、考えながら聴いていただきたいと言って、「街と飛行船」という曲の動画を見せてくれました。おそらくは戦前のドイツだと思いますが、巨大な飛行船と、それを見上げて熱狂する民衆のモノクロ映像で、こんな歌詞です。

空には飛行船、地上にはお祭り

じいさんもばあさんも 皺だらけの顔に
おしろいをべたべた塗って踊ろう

乞食も泥棒も ぼろぼろの衣装に
造花をいっぱいくっつけて踊ろう

ママコもみなし児も 涙で汚れた顔に
幸せのお面をつけて笑おう

空には飛行船 地上にはお祭り

リュウマチも小児麻痺も

曲がった添木に

リボンで飾りをつけて走ろう

踊って歌って笑って走れば・・・(以下略)

何が言いたいかというと、大勢の人たちが困難にあえいでいるなかで、権力者は、人々をお祭り騒ぎに引きずり込んで、その困難を忘れさせよう

とするということですよ。何よりも大切なことは、事実を知ることでしょう。

この間東京オリンピックをやりたかった政府は、徹底的に検査をさぼって、コロナの感染を小さくみせようとした。そもそも、原発事故からずっと原子力緊急事態宣言下であって、汚染地の人たちは苦悩の毎日を送っているのに、事故はアンダーコントロールだと大嘘をついて、オリンピックを誘致したわけで、これは途方もない犯罪だということです。

あの3.11フクシマ原発事故から、間もなく10年を迎えます。だが、10年経っても事故は終わっていません。2013年9月以来、「さよなら原発・ぎふ」の活動に参加してきました。去年は、コロナ禍の影響で、年4回の内2回パレードを中止して、参加者が減ってしまい、このまま運動が縮小することを危惧しています。

しかし、この講演を聞いて、原発ゼロの実現まで運動を続けていこうという思いを新たにしました。皆さん、ぜひ「さよなら原発パレードinぎふ」にもご参加願います。

伊藤久司（「さよなら原発・ぎふ」実行委員長）



○「地球温暖化について思う」

子供の頃の夏に、30℃になるのはめったにないことで、そんな日は特別暑い気分になっていたように思う。エアコンどころか扇風機すら無く、どの家も麻の蚊帳を吊って寝ていたものだ。半世紀以上経った今、老人がエアコン無しに寝たら熱中症になって死ぬ危険にさらされるとは、何ということかと思う。



先日、地球温暖化をテーマとしたTV番組でシベリアの凍土が溶けて色々不都合なことが起きているとか、ヒマラヤの氷河が崩れてインドで洪水が発生したなどというのを見て、ゾッと、相も変わらぬ大量生産と大量消費、不必要な食料の流通、いい加減見直して根本から生活を立て直さないと、人類は遠からず滅びてしまうのではないかと思われた。

では、私達はどうしたらよいか？ とりあえず一人一人が徹底的に節約生活を心がけると多少は改善されるとか。後は世界中の政治家が考えるべき問題であろう。

(YS)

○「youtuberが外来種をばらまく!」

現在地球温暖化に伴う気候変動や海面上昇が進行しています。様々な問題が引き起こされる中、今回はその中でも外来種問題について述べたいと思います。私は現在昆虫生態学の研究を行っており、昆虫の生息場所の調査をしています。

そうした中、先日千葉県でアルゼンチンモリゴキブリ通称デュビアというゴキブリが野外で発見されました。こうしたゴキブリはどのように野外に放たれるのでしょうか。今、若者が多く連ねるyoutube界では「どっきり企画」がひっきりなしに行われます。こうした外国産のゴキブリを知識もなく、インパクトだけで部屋にばらまいたりするような動画も多々配信されています。

デュビアは爬虫類などの餌としてもよく用いられているのでどのように野外に出たかはわかりませんが、こうした動きが加速すれば、どんどん外来種の参入は増えると思います。また現在は気温の上昇に伴い、北方に分布を拡大する種も増えています。それだけ南方の外来生物が定着しやすくなってきています。現在の流行が地球温暖化と交わり、生物多様性を脅かすことに慎重な目を向けていくべきだと思います。

(住田歩夢:山口大創成科学研究科農学系専攻)

○「偽情報の拡散と民主主義」

私たちは今コロナ禍の下にあります。世界の大多数の人々が同じ問題に直面しています。しかし、驚くべきことに、明らかと思える事実の認識を拒否する人たちがいます。日本人の多くは通常メディアを通じて知る現実に疑いを挟むことはありませんが、米国やヨーロッパの一部の国では事情が違います。例えば、ドイツでは少数派ながら、街中で「国民を騙して日常生活を規制して自由を奪っている」と、政府の「独裁」「圧政」に抗議する人たちがいます。彼らは、時折、三密を無視した大きなデモ行進を行い警察とトラブルを起こして、耳目を集める始末の悪い少数派です。

この人たちは、「コロナウイルスの問題は全て、国民をコントロールしようと企む既成権力のでっち上げ」と信じて疑わない、所謂「陰謀論者」と呼ばれる人たちです。彼らは、2016年の大統領選以来、「トランプ氏は、国民を騙し既得権益にしがみつクワシントンの既成エリートや左翼の過激派にコントロールされたメインストリームのメディアと闘っている」と信じて疑わないトランプ支持者と同類の人たちです。開かれた社会が大切にして来た「真実を担保するルール」は通じませ



ん。「コロナ禍陰謀論者」は自ら感染して、死の床に合っても、現実の受け入れを拒むそうです。陰謀論者の様な自分の世界観に合致するものしか受け入れない人たちを相手に対話は成立しません。

こういう人たちを増やさないようにするために、権力の座にある人たちは、襟を正し、持てる情報を全て提供し、公開でしっかり議論し、意志決定の事情をはっきりさせる必要があります。政治への信頼が失われれば、氾濫する偽情報や陰謀論が横行して、民主主義は機能不全に陥るでしょう。馬鹿げた心配事ではない様な気がします。

(H.Ando)



○「現代の分断は可視化されていない」

子ども7人のうち1人が貧困というが、あかぎれしもやけ、つぎはぎだらけのよれよれの服もみえない。杖をつき、よたよた歩く老人の姿だけはそこここに。でも、今にみえてくるであろうコロナ禍での倒産による、はじかれた労働者。その時私たち年金生活者には何ができるであろうか。

マスメディアでしか、世の中がみえていない自分に立つ。憲法25条の意味を考える。衣食住をまかなえる最低生活とは？ ベーシックインカムか。それにしても日本の住居費はいかにも高い。

立憲や他の野党はどんな青写真を描いているのか。政権が変わったらそれから考えようではなく、こうしたので政権を変えようというのが順当だろう。昨年、5月に亡くなられた森英樹さんの講演会で、「金だけ今だけ自分だけ」…とう言葉を聞いた。人間の心をいい当てていると思った。人間のもつ哀しい「性」(さが)を自覚すれば少しはいい世の中を目指せるのでは。

限りある生を生きる人間の幸せとは？ 母は生前言っていた。「自分が幸せと思った時、それが幸せだよ」と。人と比べないということか。

憲法12条「不断の努力」を惜しまず、来るべきその日まで元気でしよう!

百花繚乱の春はすぐ足元まで。いぬふぐり、仏の座、ねじ花にももうすぐ会える。

(ひらつか)

○「森会長さんよ よう言うてくれた」

同居の患息が森JOC会長女性差別発言を聞いて「何がそんなに問題発言なのかよう分からん」と言ったが、恐らく大方の日本男性は(いや女性もか?)息子と同程度の感想を持ったのではなからうか。森発言が国内組織での出来事なら「誤解を招いた発言をしてゴメンなさい」という程度のコメントでお終いになるところ、オリンピックという国際的な組織の発言となり世界から轟々

の批判を浴びてとうとう森会長は辞任した。

森氏が問題発言をした組織委員会でも笑いは起きたが批判した委員は誰もいなかったそうだから組織委員も我が愚息と同程度か、と偉そうなことを書いている私も組織委員の一人だったら森発言に苦笑していただけないから忸怩たる思いがある。

いずれにしても森発言が日本のジェンダーギャップ指数153か国中121位という実相を解り易く国民に示したことは間違いないであろう。その意味で森発言を、皮肉を込めて評価したい。(鷗沼の三ちゃん)

○「大坂ナオミの全豪オープンテニス優勝を祝う！」

コロナ禍のさなか、「オリンピック組織委員会森会長の女性蔑視発言と辞任劇」、「菅首相の長男が務める放送事業会社の総務省を巻き込んだ接待問題」など、様々な暗いニュースで、気分が晴れない昨今である。

しかし、テニスファンにとって嬉しいニュースがやってきた。大坂ナオミ選手が、全豪女子オープンテニス大会でチャンピオンに輝いたことだ。彼女は「アスリートである前に人間」としての矜持を世界に示し、「黒人差別」や「ジェンダー差別」の問題に対しても毅然とした発言をしていることに、感動する。彼女の勇気ある言動が、日本のスポーツ界、否、日本の社会全体にも影響力を持ってほしいと思う。「自民党村の蝸壺的」世界を変革してほしい。

最近、あちこちで国連が2015年に採択した17の持続的開発目標、SDGs (Sustainable Development Goals) が、人口に膾炙されているが、その5番目は「ジェンダーの平等性」である。ローカルな活動も世界の人権意識を向上させることに貢献するものと期待する。

(島田)

○「30年振りの株高は恐慌の前兆か？」

今日の異常な株高の背景として、緩和マネーが主因と考えられている。日本ではデフレ対策としてマイナス金利政策がとられてもう5年、また近年日銀はETF(上場投資信託)を買い続けることで低迷する株価・証券価格を買い支え、公的年金ファンドのGPIF(年金積立運用独立行政法人)もETF買いを続けてきた。その政策目標は景気浮揚につながる適度なインフレ(消費者物価2%UP)とされたが、いまだに達成の目途すら立たない。

そしてここへきてのパンデミック、政府は国債のさらなる大量発行と大規模な財政支援と融資拡大に動いたが、落ち込んだ実体経済の回復は鈍く、一方で金融は超飽和状態。だからこのマ



ネーが株式市場へ回ってバブルになっても何の不思議もない。が、実はこの株高7割が外国人投資家の売買によるものだそう。

ではかれらがなぜ日本の株取引に参入しているか。このコロナ禍が地球を覆い欧米でも経済は大変、各国とも財政金融政策も日本と似通った方法をとった結果、通貨も過飽和状態。その中で日本の状況は相対的には安定していると看做されたようだ。日本政府の買い支えを当てにできる他、円高で為替差益が期待できる、との計算が働いているという。しばらくは円高基調が続くと証券筋の見通しと一致する。

もう一つ、市中にダブつくマネーが別の高リスクな投融资の流れを作っているという話がある。ジャンク債と呼ばれる、かつてなら銀行が貸さなかったリスクの高い企業のCP(リスクの高い社債)を多くの銀行が買っているというのだ。リーマンショック前までは余剰マネーは、市中銀行が日銀に預ければ僅かでも利子は付いて一息つけたが、今逆に利子を取られてしまう時代。だから、ハイリスクを犯してハイリターンを狙うよう傾向を強めているのだと。それは当然銀行の破綻の可能性を高め、金融危機への道を広げたと、金子氏などが指摘。

我々の近未来には、気候変動による危機や中印などの人口増にからむ食糧危機なども危惧される中、コロナでさらに大規模な金融危機を入り口とする経済恐慌を引き寄せかねない日本経済、そして連動する国際経済、今後もそれらの動きに目が離せない。

(フィリピン・ウォッチャー)

○「コロナ禍にやるべきこと」

昨日も知人が軽トラックで沢山のキャベツを運んでくれましたが、これは野菜農家がコロナ禍で行く先を失ったキャベツである。このままでだと農家は畑に穴を掘りキャベツを埋めなければならないので、知人などに処分を依頼したのだ。農家のコロナ禍による影響は深刻さを増し、農業、漁業に対する国などの支援の遅れは酷く、あるいは忘れられているのではないかと思う程である。

この状況でも「軍事費をコロナ対策にまわせ」の動きが一向に盛り上がらないのが不思議だ。国会では来年度予算を審議中だが防衛予算増大に「待った」をかける気配すらない。誰かが言い出しても良いと思うが、一向に出て来ない。特に「敵基地攻撃能力」に転向が可能な武器などはまさに「不要不急」であり、「民意」の大多数



が「コロナにまわせ」に賛同なので、これを仕掛けるリーダーの出現が必要であるが、それには「民意」の支援が肝心である。

オリンピックの森会長はわずか1週間で退陣したが、これは「民意パワー」の結果である。「軍事費をコロナにまわせ」の実現も「民意パワー」次第であり、実現の可能性は充分にあると確信している。(井口)

○「○△は◇！」

森羅万象という言葉があります。「天網恢恢、疎にして漏らさず」とは数理処理(デジタル)のなせる業でしょうか。

案じられる事態は何を深めるかということでしょうか。男女平等(ジェンダー)差別について分かりやすくすることとお互いが大切にしようことでしょうか。とは言っても不得意な分野があることは自覚しているつもりですが。

では、母性保護という内容がありましたが必要な規制(権利保障)も必要です。同じような働き方を求めることは別問題です。

外来語は分かりやすくする必要があります。アファーマティブ・アクションやラポリティカル・エレクツネスなどありました。あまり、外来語を使いたくありませんが。女性の参政権が認められたのは圧倒的に20世紀になってからです。

でも、実現の動きは種々ありました。これこそが大切では。当方も中学校の短髪廃止の中で女生徒の頭髪問題も共に議論しました。

ある大学のある学科で、女性の志願者がいないにもかかわらず女性の推薦枠を作るということがありました。

決め込みではなく、生活の実態を権利保障の前進にする本論で深めたいです。(野口)

○「秒読みの中で」

私は今、二つの学校で日本語教師をしている。一つは従来型の教師が教壇に立ちテキストを教え、テストで理解度をはかる学校。校則がありアメと鞭で課題に向かわせる。携帯はもちろん禁止。もう一つの学校は教師である私は、教室の隅。学生が、司会進行。各自課題を決め情報を集め、仲間を作り話し合いを重ね、活動をして成果を発表、振り返る。今取り組んでいるテーマは、「ポラントピア」。教師は口を出さず、課題遂行

能力を評価していく。

前者の学生は与えられた事しかやらず、学校が終われば母語で話しゲームに夢中。後者は言葉の確認から自分の意見を持ち、グループラインを作り、できることを仲間と模索しながら準備を進める。日本語が間違っても話さなければ始まらない。

コロナ渦、「マスク」「三密」

「緊急事態宣言」などのキャッチフレーズが溢れる。私たちはそれらを吟味したのだろうか。「オリンピック開催」についてアスリート、市民は自分の意見を持ち討議したのだろうか。「地球温暖化」は、本当にマイバッグ、プラスチックごみ削減、節電で止められると思っているのだろうか。すべては秒読み。今を生きる私たちの課題遂行能力がためられている。(かこちゃん)



○「女と男」

ある会議で雑談していた時、今問題になっている男女差別について話題になりました。今まで何の考えもなく使っている言葉や態度で、例えば「男のくせに」「それでも男かよ」「男だからできる」「お前男だろ」「男一匹」「男前」「男〇〇」「男尊女卑」など。また学校でも当たり前前に使ってきた言葉に「父兄懇談」、出席簿の順、並び順など、男が先のことが日常当たり前に使われてきました。

私が初めて赴任した学校で、職員室で先生たちにお茶を出しました。そのとき女の先生に持って行ったら、「男の人にお茶を出してもらうなんてもったいない」と言われてびっくりしたことを思い出しました。私は男ばかりの兄弟で末っ子でしたから、母が仕事で忙しいときはよく食事作りを手伝っていましたので、お茶を出すことなど当たり前前に思っていました。

当たり前前に使ってきた言葉や態度に、良く考えると男女差別がたくさんあることに気が付きます。いま一度見直していかなければと思いました。

まして東京五輪組織委員会前会長の森喜朗氏(政治家)が公の場で、男女差別する発言をするなんて許せませんでした。

とにかく日常使っている言葉に、責任を持たなければならぬとつくづく考えさせられました。(市原)



三上智恵著『証言 沖縄スパイ戦史』 集英社新書、2020年

ドキュメンタリー映画「沖縄スパイ戦史」は、スパイ養成機関である陸軍中野学校が絡んだ沖縄本島北部や八重山での「沖縄戦」の惨状を私たちに教えてくれた。本書はその「沖

縄スパイ戦史」を大矢英代さんと共同監督した三上智恵さんが、綿密な取材をもとに書き下ろした「沖縄スパイ戦」の総括と言える。

当時10代半ばで「護郷隊」に「徴兵」された元隊員

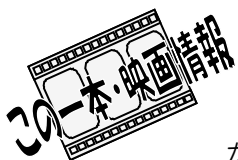
たち、軍に協力した住民(中にはスパイ扱いされ殺されかけた人も)、当時子どもだった人などからの聞き取り。中野学校で訓練を受けた「護郷隊」指揮官の2人や住民と関わった軍人たち、そして「スパイ」として「処刑」された人々への追跡調査。ゲリラ戦に関する軍の命令等の調査。これらを丁寧に行った三上さんは、「沖縄スパイ戦」について次のように述べる。

「陸軍中野学校の職員たちが敵を欺いて情報を取るというだけでも、少年や住民を使ってスパイ戦やゲリラ戦を展開したことだけでもない。軍が住民を欺き「始末のつく」状態にすること、また軍がスパイ容疑で住民を手にかけてたり、住民同士がスパイの容疑をかけあうなど、秘密戦の枠の中で「スパイ」という概念は、相互に悲劇を生む多義的な忌まわしい言葉である」と。さらに自衛隊の動きへの危惧も述べ

ている。

三上さんのこの言葉は、私の沖縄戦の悲劇への理解、つまり言葉や文化の違いなどからくる「ヤマト」の差別意識や猜疑心が住民虐殺などの悲劇を生んだという理解を、大幅に修正させた。三上さんは、護郷隊(遊撃隊)と同じ「国土防衛隊」が、中野学校出身者によって全国で作られようとしていたこと、その実例として山県市の旧高富町にあった部隊を紹介している。もし、「本土決戦」が行われていたなら…。

(T・ikawa)



バルナバーシュ・トート監督 「この世界に残されて」(ハンガリー、2019年)

1948年のハンガリー、初潮が来ないことを心配した大叔母のオルギに連れられて、16歳の少女クララが42歳の婦人科医師アルドの診察を受けるところから物語は始まる。オルギとの暮らしに不満を持つクララは、寡黙な医師アルドに惹かれるものを感じる。オルギの希望があり、アルドはクララを週の半分彼のアパートに住ませ、「父娘」の暮らしが始まる。ある日クララは、アルドも自分と同じくホロコーストによって家族を奪われていたことを知る(アルドの腕には強制収容所の「囚人」だったことを示す数字が刻まれている)。クララにボーイフレンド(ペペ)ができると、アルドはかつての患者であり、戦争で婚約者を奪われたエルジを伴侶とすることをクララに告げる。

その頃ハンガリーは「社会主義」化(スターリニズム支配)の影に覆われ、電話の盗聴や親しかった人々の相互監視、夜中の連行などの事件が2人の周りで起きる。

時はたって1953年、オルギにクララとペペ、アルド夫妻が集まったパーティーのさなかに、ラジオからスターリンの死を伝えるニュースが流れる。この知らせ

に、若者は喜び未来を語るが、大人は不安の影を感じるところでこの映画は終わる。

第2次大戦中はナチスに、大戦後はソ連社会主義に翻弄されるハンガリー(スターリン死後のつかの間の民主化も「ハンガリー動乱」という形で圧殺され、アルドたちの不安は的中した)。ホロコーストもスターリニズム支配

もこの映画は声高には語らないが、アルドの「寡黙」とクララの言葉「ホロコーストで去った人より残された私たちの方が不幸だ」は、どちらもより強く心に突き刺さる。

残された人々の深い悲しみと諦めが、そして私ならどう生きるべきか…、という問いも。(Toshiro)



<伊自良だより(上)> 「終の住処、伊自良へ」>

私も今年80。これ以上もう歳はとらないことにしているが、今いるこの地、伊自良が私の終の住処…と思っている。

私は東京に生まれて、戦時中の疎開、父の転勤、学生時代の寮、就職、結婚、道路建設の立ち退き、等々で、14~5回、転居をくり返してきた。その中で、一番長く住ん

でいるのが、この地である。

伊自良には古墳がいくつも残っている。昔から人が住みよい土地だったのだろうか…。

時代は下って、鎌倉時代、今の茨城県水戸市あたりにいた豪族八田有知が、承久の乱(1221年)の勲功により、美濃国山県郡伊自良郷を与えられ、伊自良館を構えて

初代伊自良氏としてこの地を治め、越前国の方面にも勢力を広げていったという記録がある。(『伊自良氏の由来』碑文より)

それから更に時代は下って、いくつもの小さい部落が点在していた伊自良地域は、明治30年(1897年)に、北は上伊自良村、南は下伊自良村の二つにまとめられた。

そして昭和24年(1949年)、この二つを校下にした新制中学校が設立された。小学校は、北と南にあったものがそのまま残されることになったが、新設される中学校は、その建設場所、建設費の工面など、2ヶ村の各部落で何度も話し合いを重ね、共有林を伐採したり、徴収金を集めたり、勤労奉仕作業をしたり、生徒自身も運動場整備を手伝ったりして、完成させたのだと言う。(『郷土誌』より)

その後、昭和30年(1955年)、上・下伊自良村が合併して一つの伊自良村となった。(『伊自良村の変遷』碑文より)

その翌年から、村役場、中央公民館、図書館、美術館、民族資料館、老人福祉センター、運動公園などが順次作られていった。また、雨乞い太鼓や竜廻しなどが伝わっていて水に苦勞していたこの地に、待望の伊自良

湖が完成したのが昭和46年(1971年)だった。

私は平成10年(1998年)にこの村に転居して来た。転入手続きに應對して下さった役場の人は、大変に親切だった。”お役所仕事”とは思えない優しさで、書類を「帰り道だから」とわざわざ家まで届けて下さったこともあった。



伊自良湖(山県市HPより)

役場で頂いた「村民憲章」は素敵なものだった。

私たち伊自良村民は

- 1 自然と文化財を守り 美しい村をつくります
 - 1 教養を高め 文化の香り高い村をつくります
 - 1 健やかな心と体で働き 活気ある村をつくります
 - 1 きまりを守り 助け合い 住みよい村をつくります
 - 1 平和を愛し 希望に満ちた 明るい村をつくります
- また、「非核平和都市宣言のまち」でもあった。

(→次号に続く)

(あ)

<世界一周貧乏旅 その19>「あなたの視力が問われるモナ・リザ」

みなさま、目はいいですか？

僕は遺伝なのか中学生の頃から眼鏡をしていて、大人になった今では、コンタクトレンズをしなければ父親の顔を見て「お母さん」と呼んでしまいます。

視力の話は一旦置いて、フランスのパリにはかの有名なルーヴル美術館が存在します。そしてほとんどの来館者の目当ては、『モナ・リザ』を観ることではないでしょうか。

『モナ・リザ』は、1500年代にイタリアの美術家レオナルド・ダ・ヴィンチに制作され、それは上半身のみが描かれた女性の肖像画で、『世界でもっとも知られた、もっとも見られた、もっとも書かれた、もっとも歌われた、もっともパロディ作品が作られた美術作品』といわれております。その知名度はまさに世界規模であり、毎年およそ600万人の観客がモナリザを観るためにルーヴル美術館を訪れています。

しかしそんな不動の人気を誇るモナリザも、残念なことに世界のがっかりスポットとしてもその名前が有名であります。

その理由は、絵との距離があまりに遠すぎることです。

展示されたモナリザの目の前には分厚い防弾ガラスが設置されていて、そこから5メートル離れて太い木製の柵で囲われ、さらに数メートル離れて簡易的な柵があり、そこからやっとモナリザを鑑賞できる、と思いきや、その柵の周りは大量の人間がごった

返しており、まともに絵を観ることなんてできません。

人の隙間を縫ってやっと絵を観れたと思っても、絵との距離が遠すぎてよほど

視力が良くなければ絵の細部まで確認することはできません。その距離でモナリザがはっきりと観ることができる方は、恐らく健康診断の視力検査で好成績を収めることができるでしょう。

距離を隔てる邪魔な柵はどうやら昔はなかったらしいのですが、年々絵と人とのソーシャルディスタンスは遠くなるばかりだそうです。というのも、以前にモナリザは石を投げられたり酸を浴びせられたりスプレーを吹きかけられたり、さらになんと盗難にもあっているらしく、その価値もさることながら、過去の事件を考えればこの厳重な警備も少し納得してしまいます。

ちなみに、ルーヴル美術館公式サイトでは、画像としてモナリザを見ることができ、しかもルーペ機能によって絵の表面の細かいひび割れに至るまで拡大し閲覧することができます。実物の絵との距離はどん



どん遠くなっているのに、ネットの画像はごく細部まで見ることができるなんて皮肉です。
視力が良くて遠くの物が見えることも、ダヴィンチ

の描いた本物のモナリザを見ることも、時代と共にその価値は薄れていってしまうのかもしれませんが。
(カモノハシタニ)

2021年前半 哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00~21:00です。

会場は、ふれあいスペースです。

第151回例会 1月14日(木)	「世の中を明るくするには何が必要か？」 *新型コロナ蔓延が「永続波」となり、ワクチンのみが明るい材料。だがどうか。 *コロナ危機で新たな変革の兆しが見えてきたが、これをどう実現するのか。	中止 しました
第152回例会 2月11日(木)	「攻撃優先を進める<理論>と<予算>を問い直す？」 *コロナ対策のために膨大にふくれあがった予算は、一体どのように使われたのか。 *その影に隠れて推進される自衛隊の攻撃軍隊化。その危険な理論とムダ予算に	中止 しました
第153回例会 3月11日(木)	「2050年までに温室効果ガスゼロは可能なのか？」 *世界の趨勢にまったく反する政策をとってきた日本政府は、突然、ゼロ目標発表。 *これはCO2ゼロではなく、原発も含めているまやかしのもの。これでいいのか。	
第154回例会 4月8日(木)	「教育で大切なことは・・・コロナ危機を通して？」 *コロナ危機の中で、教育のあり方、内容、制度は変えざるを得ないことが生じた。 *少人数教育へ一歩踏み出したが、リモート教育の推進、管理主義、高い教育費は？	
第155回例会 5月13日(木)	未定	
第156回例会 6月10日(木)	未定	
第157回例会 13周年記念行事	7月3日(土)or 10日(日) 創立13周年記念行事 *昨年はコロナのため中止。今年は何とか開催できるように願っています。 *今年はどうのような内容にするのか、早めに意見を寄せて下さい	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

わいわいがやがや
アラカルト



★2011年3月11日午後2時46分18秒、東日本大震災が起きた。その時、たまたま岐阜市内の介護施設のホールで講演していた。司会者の「先生地震のようです」という声が聞こえた。多分何秒か後だろうが、後日に確認したら、各務原では震度3前後だった。

★ホールでは揺れても時計をはじめ、昔のように動くものはなく、すぐには気がつかなかった。家に帰ってからびっくりした。世界的に見ても極大地震で、大津波が起こり、福島原発が大被害を受けた。

★東京に居た娘から、東京は危ないらしい、アメリカ人は皆避難しているよ、と知らせてくれた。その後次々とテレビなどで恐ろしい映像が送られてきた。その光景は、後日現地を訪れてその凄ま

じさを目にすることができた。

★この地震は自然災害だが、津波による原発の破砕は人災である。武藤類子さんたちのたちの告発によって国家や東京電力の責任が問われ、その成果が少し始めている。

★今年の3月11日に10周年を迎える。ボクの敬愛する井上ひさしはその参議機の前の2010年4月9日に亡くなった。だが、『父と暮らせば』をはじめ原発投下の苦難を訴え、1986年のチェルノブイリ原発事故に重大な関心を寄せている。

★その記録「原発事情ノート」に、「これまでのような生き方はできない。・・・他人のことは自分のこと、自分のことは他人の問題と、まず決意すること」と記した。いま、改めて人類の行く末を考える一人としてこの問題に向き合いたい。(千秋)